

オンラインでのピア・レスポンスにおける助言表現

——学習者の《助言》の伝達方略の傾向——

齊藤幸一（大阪電気通信大学）

嶋田みのり（東北学院大学）

宮原千咲（広島修道大学）

要 旨

ピア・レスポンスとは、学生同士の学び合いによる作文活動を指す。本来、ピア・レスポンスは対面で行う活動であるが、コロナ禍の影響により遠隔で実施した。本研究の主目的は、このような活動を活性化させる指導方法の開発である。そこで本稿では、オンラインでのピア・レスポンスにおける助言表現を収集し、《助言》の伝達方略の観点から分析を試みた。その結果、オンラインにおけるピア・レスポンスでは相手の成果物の現状について言及しない傾向が明らかになった。また、《助言》の伝達方略に分類できなかったものの多くは、助言者がレポートに関する自らの見解を述べることでそのまま《助言》が遂行されるものであることがわかった。

キーワード：助言、ピア・レスポンス、遠隔授業、《助言》の伝達方略

1. はじめに

本稿は、オンラインでのピア・レスポンスにおける助言表現を研究したものである。ピア・レスポンスとは、「学習者が自分たちの作文をより良いものにしていくために仲間 (peer) 同士で読み合い、意見交換や情報提供 (response) を行いながら作文を完成させていく活動方法」(池田 2004) である。留学生を対象にした日本語教育だけではなく、学生の主体性や課題解決能力を育成していくことが注目されていった大学教育の中で、文章表現法などのアカデミックライティングを扱う学部生対象の教養科目などで導入されている。

2020年、コロナ禍による緊急事態宣言の発令により、全国の大学が対面授業から遠隔授業に移行せざるを得なかった。第二著者が担当するライティング科目においても、対面授業からオンデマンド方式の遠隔授業に移行し、e-ラーニング学習管理システムである LMS (Learning Management System) の掲示板のような機能を活用して、オンラインでピア・レスポンスを行い、お互いのレポートを評価し、アドバイスをし合った。その際に学生からは、アドバイスすることが難しい、また頭の中に具体的なアドバイスが思い浮かんでいても、自分の意見を相手になかなか伝えることができないという声があった。このような学生に対して、どのように指導すれば、オンライン上のピア・レスポンスが活性化されるのだろうかということが本研究の出発点である。

本稿では、オンライン上における学生同士の助言表現にどのような傾向があるのか、調査し、分析していく。

2. 助言について

助言は、その言語形式が多様であるため、どの言語形式が助言なのか、その判断が大変難しい。そのため、その言語形式のみではなく、言外の条件を考慮する必要がある。そこで、本稿では、助言の定義を《依頼》や《命令》をはじめ、網羅的に発話機能の各範疇及びそれを定義的に規定する語用論的条件を整理した山岡の発話機能論の《助言》に基づき、山岡・牧原・小野（2018）の定義を採用する。

山岡の発話機能論における《助言》の定義については、以下のとおりである。《助言》は、参加者の行為に対する制御機能を持つ{策動}に分類される。その会話の目的は、「参加者 A が、自身の利益のために、ある行動を行うこと」である。《助言》を定義的に規定する語用論的条件は、「①当該行為が参加者 A の意思によってなし得る行為であること」「②通常の事態の進行において参加者 A が当該行為を実行するのは自明ではないこと」「③参加者 A による当該行為の実行は参加者 A 自身に利益をもたらすこと」である。例えば、「太り過ぎて困っているんですが」という発話に対し、「毎日運動するといいですよ」という発話が、先に述べた語用論的条件をすべて満たし、会話の目的を達成しようとする《助言》となる。

{策動} : 《助言要求》・《助言》

会話の目的 : 参加者 A が、自身の利益のために、ある行動を行うこと

語用論的条件 :

- ①当該行為が参加者 A の意思によってなし得る行為であること
- ②通常の事態の進行において参加者 A が当該行為を実行するのは自明ではないこと
- ③参加者 A による当該行為の実行は参加者 A 自身に利益をもたらすこと

用例 :

「太り過ぎて困っているんですが」「毎日運動するといいですよ」

※山岡・牧原・小野（2018）より

3. 先行研究

日本での助言研究については、熊取谷・村上（1992）を端に発する。熊取谷・村上（1992）では、助言という発話行為について、Searle（1969）の適切性条件をもとに語用論的条件特徴（性格・構造）を記述し、助言のプロトタイプを示した。具体的には、助言のプロトタイプとして、行為 X 及び状況 S1、S2 の 3 つを構成要素とした “Do X for S2 because S1 (is not desirable).” という語用論的構造を提案している。彼らによると、助言は、S1 が聞き手にとって望ましくない状況（S1）という認識・評価が原因で遂行され、また、聞き手の行為 X は、より望ましい状況（S2）を生み出すことを目的としたものであるとしている。例えば、父親が茶を入れているが、もう色が出なくなっていることを述べた際に、娘が父に「新しいのに入れかえればいいじゃん」と述べた発話は、行為 X を指示する助言となる。

そして、熊取谷・村上は助言のプロトタイプを構成する 3 つの要素（X、S1、S2）の組み合わせから、その表現類型を規定し、「助言の伝達方略」と呼んだ。その類型は、以下のとおりである。

【助言の伝達方略の種類】

- ①X の提示
- ②S1 の提示
- ③S2 の提示
- ④X+S1 の提示
- ⑤X+S2 の提示
- ⑥S1+S2 の提示
- ⑦X+S1+S2 の提示

鹿島（2000）では、熊取谷・村上（1992）の助言の伝達方略を用いて、日本の自然会話、TVドラマ、および英語の映画会話を分析している。その結果、日本語と英語の助言の伝達方略を選択する傾向は似ていることを明らかにした。日本語・英語ともに用例全体の3割前後が「X+S1の提示」、これに続いて頻出が多かったのが、「Xの提示」、「X+S2の提示」であった。

高橋（2017）では、大学教員と院生の間のオフィスアワーの相談会話を分析し、教員の助言意図の表現を9つの型に分類した。具体的には、助言発話の9つの型として、「1.行為指示型」、「2.見解述べ型」、「3.情報提供型」、「4.提案（選択肢与え）型」、「5.承認与え型」、「6.見通し（聞き手利益の提示）型」、「7.警告型」、「8.勧誘型指示型」、「9.あたかも願望型」を挙げた。その中で、最も頻度が高かったものが、主に「～て」や「～てください」の形で直接聞き手の行為を指示する「1.行為指示型」であった。次に、「面白い」や「～しないとイケないとおもうんですね」などの様々な言語形式で助言が行われた「2.見解述べ型」である。そして3番目に多かったのが、終助詞の「よ」や「わけです」という表現を用いて、聞き手が知らないことを教員が教えるタイプの「3.情報提供型」であった。

伊佐（2020）では、対面でのピア・レスポンスにおける助言について、だれのどのような助言が、論文の推敲に反映されやすいか分析している。そこでは、教員と学生の助言を「質問」「感想」「提案」「判断」「依頼」に分類し、その頻度と論文の推敲に反映されているかを分析している。

このように先行研究では、さまざまな言語形式があって捉えにくい「助言」という言語現象に対し、語用論的条件を整理し型に分類しながら、その傾向を分析するということが行われてきた。しかし、オンラインによるピア・レスポンスの《助言》を研究対象とした研究は、管見の限りない。2020年のコロナ禍による影響で全国の大学が遠隔授業をせざるを得なかったが、今後はすべての授業が対面授業に戻るのではなく、遠隔授業のほうが多淫面授業に比べて教育的効果が高いと考えるものに関しては、このまま遠隔授業の形式で継続していくことが予想される。そのような中において、学生の学習活動を活性化させるピア・レスポンスは今度も重要な学習法として位置づけられていくだろう。そこで、本稿では、オンラインによるピア・レスポンスの活性化を目的に、オンラインによる《助言》を研究対象として、語用論的分析を試み、オンラインによるピア・レスポンスの助言表現について、その特徴を明らかにしていく。

4. 研究方法

研究対象として 2021 年前期に実施した東北学院大学 1 年生対象の教養科目「読解・作文の技法」受講生 142 名からピア・レスポンスのコメントから《助言》の用例を収集した。授業がオンデマンド形式の遠隔授業であるため、学生はその講義動画及び LMS 上での課題指示文の指示に従い、ピア・レスポンスのために学生が作成したレポートを LMS でオンライン上にアップロードした。他の学生がそれレポートを見て、LMS の掲示板機能を使って、そのレポートがさらによくなるようにアドバイスを書き込んでいく。そこに書き込まれた用例から、斉藤・嶋田・宮原で《助言》だと判断した表現 105 例を研究対象とした。教員から学生に LMS 上で課題を指示した具体的な指示文は、以下の通りである。

【課題指示文の内容】

アウトラインをグループで共有し、他のメンバーのアウトラインを読んでコメントをつけます。この活動は、お互いのレポートの質をよりよくするために行います。「どうすればよりよいレポートになるか」読み手の立場から、コメントをしてみましょう。

◆共有の仕方【共有は、なるべく早め（1～2 日程度）にしてください。】

「コメントを書く」のところに、以下の 3 点について書きます。

①自分のレポートについて、簡単に紹介する。

例) 今回、私は、～～をテーマにレポートを書こうと思っています。

②特に悩んでいるところ、難しいと思っているところ、アドバイスが欲しいところ、見てほしいところについて書く。

③アウトラインを貼り付ける。

◆コメントのつけ方【コメントもなるべく早めにつけるようにしましょう】

①アウトラインを読んでよかったところ、自分のレポートにも取り入れたいと思ったところ。

②アウトラインを読んでもっと知りたいなと思ったところや質問、改善点など自信がなくても、「～なのでは?」「～してみるとよりよくなるかも!」と提案してみましょう。

※相手のコメントや指摘を取り入れるかどうかは、最終的には書き手が判断します。納得しなければ、修正する必要はありません。

研究方法としては、LMS で収集し助言と判断した用例 105 例を、熊取谷・村上（1992）の 7 つの伝達方略の型に沿って分類し、オンラインによるピア・レスポンスの《助言》の伝達方法の傾向性を調査し、分析をしていく。

5. 結果と考察

オンラインでのピア・レスポンスにおける《助言》の調査結果は、表 1 のとおりである。まず、一番多く見られたものは、「5. X+S2 の提示」が 29 例で全体の 27.6% を占めた。次に多かったのが「1.X の提示」が 25 例で 23.8% であった。三番目には、「3.S2 の提示」が 14 例で 13.3% となっている。「8.その他」は、7 つの伝達方略に分類できなかった

ものである。「8.その他」の内訳は、著者らで行った。詳細は、後述する。

表1：オンライン上のピア・レスポンスにおける《助言》の類型分布

	《助言》の型	用例数 (%) ※105例 (100%)
1	Xの提示	25例 (23.8%)
2	S1の提示	4例 (3.8%)
3	S2の提示	14例 (13.3%)
4	X+S1の提示	1例 (0.9%)
5	X+S2の提示	29例 (27.6%)
6	S1+S2の提示	0例 (0%)
7	X+S1+S2の提示	0例 (0%)
8	その他	32例 (30.4%) (レポート内容に対する主張 17・承認付与 5、情報提供 5、表出 4、 意思表示 1)

5.1. 《助言》の型の用例

オンラインでのピア・レスポンスで見られた「1.Xの提示」の用例は、以下のようなものである。

- (1) それぞれの課題や対策について具体的にどんな内容があるのか調べて書いてみるといいかもしれないです！！
- (2) 日本の子供の貧困家庭への社会保障はどうなっているのか書いてみるのはどうでしょうか？？

(1) では、「調べて書いてみるといい」と直接的に行為 X の提示を行っている。ここで後続している「かもしれない」は、相手への行為指示の表現を緩和する配慮表現として使用されている。また (2) では、「書いてみるのはどうでしょうか」と、行為 X を提案している。このように、S1 や S2 に言及することなく、《助言》を行っている。

「2.S1の提示」の用例は、以下のようなものがあつた。

- (4) 消費税に関してとても分かりますし伝わってきたのですが、日本では少し現実的ではないと思われてしまうかもしれないなと思いました。
- (5) 問いとまとめが完全に対応しきれていないのが気になりました。

(4) では、レポート作成者に対し、そのレポートの内容が「日本では少し現実的でないとされる」可能性があるとして、そのレポートの評価に関する望ましくない状態 (S1) が述べられている。(5) では、レポートの「問いとまとめが完全に対応しきれていない」と、レポートの整合性に関する望ましくない状態 (S1) が述べられている。「2.S1の提示」は、4例 (3.8%) と他の伝達方略に比べて少なかった。

「3.S2の提示」では、以下のような用例があつた。

- (6) 女性差別により就職に困っている人の実際の記事などがあると書きやすくなるのではないのでしょうか

(7) 国の支援の内容は十分なのが気になったのでそこについて詳しく書かれているとわかりやすいと思いました！

(6) では、「実際の記事がある」という条件下では、レポート作成者にとってレポートが「書きやすくなる」という望ましい状況 (S2) が記述されている。(7) では、同じように、「詳しく書かれている」という条件下で、「わかりやすい」という読み手もしくはレポート作成者にとって、そのレポートの望ましい状況 (S2) が書かれている。このように、「実際の記事がある」「詳しく書かれている」というレポートの望ましい状況を仮定し、「書きやすい」「わかりやすい」などのレポート作成者および読み手にとっての望ましい状況 (S2) を述べることで、間接的に行為指示を行う《助言》になっている。

「4.X+S1 の提示」では、以下の用例 1 例のみであった。

(8) しかしこのテーマで進めるのは少し厳しいと思うので、校則を変えようとするのでは無くどのような理由からその校則が定められているかなどを調べていくのはどうでしょうか。

(8) では、レポートを「このテーマで進めるは少し厳しい」という望ましくない状況 (S1) に後続して、「調べていくのはどうでしょうか」と行為 X を提示している。

「5.X+S2 の提示」は、オンライン上のピア・レスポンスにおける伝達方略の中で最も頻度が多く、以下のような用例が見られた。

(9) 今のままでも十分良いと思うのですが、学校でのジェンダー問題を書く私たちにも想像しやすくもう少し良くなると思います。

(10) ジェンダー不平等対策への提案は今のままでも良いと思うので、男性が育児休暇を取れる環境作りなどについて、さらにその具体例を書いてみるとよりわかりやすくなると思いました。

(9) では、レポート作成者に対し、「ジェンダー問題を書く」という行為 X をするという条件下では、レポートがよくなるという望ましい状況 (S2) になることを述べている。(10) も同じように「具体例を書いてみる」という行為 X をするという条件下においては、レポートが「わかりやすくなる」という望ましい状況 (S2) になると書いている。仮定・条件の接続助詞「と」を使い、望ましい状況 (S2) を記述している点では、「3.S2 の提示」の用例と似ているが、「3.S2 の提示」は、行為 X を示唆しつつも明示はしていない。それに対し、「5.X+S2 の提示」では、行為 X が明示されているという違いがある。

「6.S1+S2 の提示」と「7.X+S1+S2 の提示」は、今回の調査では用例が見つからなかった。

5.2. 《助言》の型に当てはまらなかった「8.その他」の用例

本研究で取り扱った用例 105 例中、32 例が 7 つの《助言》の型に分類できなかった。その 32 例を、著者らで分類したのが表 2 である。

表 2 : 「8. その他」 の分類

	「その他」 下位分類	用例数 (%) ※32 例 (100%)	用例
1	レポート内容に対する見解	17 例 (53.1%)	レポート内容に対する見解
2	承認付与	5 例 (15.6%)	「今のままで大丈夫です」
3	情報提供	5 例 (15.6%)	「〇〇について、・・・ということ を聞いたことがあります」
4	表出	4 例 (12.5%)	「〇〇がどういうものか気になりました」
5	意思表示	1 例 (3.1%)	「私だったら・・・します」

「1. レポート内容に対する見解」では、以下のような用例が見られた。

(地球温暖化について私たちにできることはないかという《助言要求》に対して)

(11) 簡単にできる事として、冷房を1度高く、暖房1度低く設定したり、長時間家にいない時に、コンセントを抜いてもいい家電のコンセントを抜いておくなどがあると思います。

(12) 私たちにできることの一つとして WWF ジャパンなどの NGO に少額でも募金をして活動支援をすることはどうでしょうか？

(11)、(12) は、ともに同一のレポート作成者に対して、《助言》したものである。まず、この《助言》の前に、レポート作成者は、LMS の掲示板機能を使って他の学生に対し「地球温暖化について私たちにできることはないか」とレポート内容に関する質問をして《助言要求》をしている。その質問に答える発話として、「家電のコンセントを抜いておく」や「募金する」などの自身の考えを述べ、《助言》を行っている。

次に、「2. 承認付与」では、以下のような用例があった。

(レポートの進め方やタイトルのつけ方についての《助言要求》に対して)

(13) 進め方ですが、読んでみましたが大丈夫だと思いますよ。

(14) 進め方も今の状態で問題ないと思います。

(15) タイトルに関しては本文の内容とぴったり合致しているので違和感はないと思います。

(13)、(14)、(15) の用例では、「1. レポート内容に対する見解」の用例と同じように、レポート作成者から、レポートの進め方やタイトルのつけ方について質問がされ、《助言要求》が行われている。それに答える発話として、「大丈夫」「問題ない」「違和感がない」と、レポートの現状に対して承認を付与している。

「3. 情報提供」では、以下のような用例があった。

(16) 都市部への人口移動によって生じる課題に、人間関係が希薄になるという話を聞いたことがあります。

(17) コロナが原因で女性にとって必要な物が買えないというニュースを見ました。

(16)、(17) の用例では、レポートの内容について関連があると思われる事柄を「聞いて

たことがある」「というニュースを見た」と述べ、情報提供をし、《助言》している。

「4.表出」では、以下の用例があった。

(18) 日本や他国の消費税制度の内容が気になりました。

(19) また、なぜたくさん国がある中でもバングラデシュという国を選んだのか疑問に感じました。

(20) 台湾のファンについてもっと知りたくなりました。

(18)、(19)、(20) は、レポート内容に対して、助言する側の学生が自分の感情を表出することで《助言》としたものである。レポートの内容に関連のある事柄について「気になりました」「疑問に感じました」「知りたくなりました」と、助言者の感情を表出することで、間接的に、その事柄について詳細を記述したほうがよいと《助言》している。

「5.意思表示」の用例は、以下の1例のみであった。

(レポート内容の順序がこれでよいかという《助言要求》に対して)

(21) 私だったら A さんと同じ順番で書きます！

(21) では、事前にレポート作成者から「レポートの内容の順序がこれでよいか」と質問をし《助言要求》をしている。それに対して、「私だったら」と自分の場合を仮定し、「同じ順序で書く」と意思表示をすることによって、レポート作成者の質問に対し「今のままの順序でよい」と間接的に承認付与を行い《助言》している。

以上、「8.その他」の《助言》の用例についてみてきたが、それらは、レポートの内容や、タイトルのつけ方など、レポートについてその見解を質問するという《助言要求》に対して応答したものが多かった。

5.3. 考察

以上、オンラインのピア・レスポンスにおける《助言》の調査結果とその用例を見てきた。その結果、《助言》の伝達方略の7つの型では、「5. X+S2 の提示」(27.6%)、「1.X の提示」(23.8%)、「3.S2 の提示」(13.3%) の順で頻出が多かった。一方、「2.S1 の提示」(3.8%)、「X+S1 の提示」(0.9%)、「S1+S2 の提示」(0%)、「X+S1+S2 の提示」(0%)、と S1 を含む《助言》の用例数が極めて少なかった。これは、鹿島(2000)では、日本語・英語の会話での《助言》において、「X+S1 の提示」が一番多かったのに対して、本研究結果では、1例のみで全体の0.9%という全く異なる傾向が見られた。また、S1 を扱う《助言》の型の頻度が、極めて少ないことから、《助言》を行う学生は、レポート作成者の学生に対して、そのレポートの現状や望ましくない状況を書き込まない傾向にあると言える。これは、現状分析やその言語化が難しいことが原因であることも考えられるが、レポートに対して、望ましくない現状を述べることは、相手のネガティブ・フェイスを侵害するため、ポライトネスの観点から、言語化を避けているとも考えられる。今後、学生のピア・レスポンスにおいて、《助言》の質が高めるためには、レポートの現状について言及するように指導することが必要であろう。

次に、7つの《助言》の型に当てはまらない「8.その他」の《助言》は、レポート作成者のレポート内容に関する質問を通した《助言要求》に対して、助言者がその答えとして

見解を述べたものであった。これは、7つの《助言》の型に分類される《助言》が、レポート内容への見解ではなく、根拠あるデータを揃えることでさらによいレポートになったり、視点を変えて資料を調査したほうがよいといったりするような、その多くが「レポート」のあり方やその作成方法について言及したものに対し、「8.その他」では、レポートで扱われているテーマに関する内容に言及したり、「レポートは現状のままでよいか」というレポート内容に関する質問をした《助言要求》に対して、承認付与や、情報提供、意思表示などの助言者の見解を通じて《助言》したものであるため、助言内容の次元が異なると考えられる。これは、「やせるにはどうすればよいか」という《助言要求》に対する《助言》が、そのまま行為 X や望ましくない状況 (S1)、望ましい状況 (S2) の3つの要素で《助言》が遂行されるのに対し、「このレポートをよくするにはどうすればよいか」という《助言要求》に対する《助言》が、先の3要素によって遂行されるレポートのあり方やレポートの作成方法に関する《助言》だけでなく、3つの要素を含まずともレポートに関する助言者の見解を示すのみで、そのまま《助言》が遂行されることに起因している。ピア・レスポンスにおける《助言》は、以下の図1のように、大きく二つの方向性もしくは2重構造になっていると考えられる。

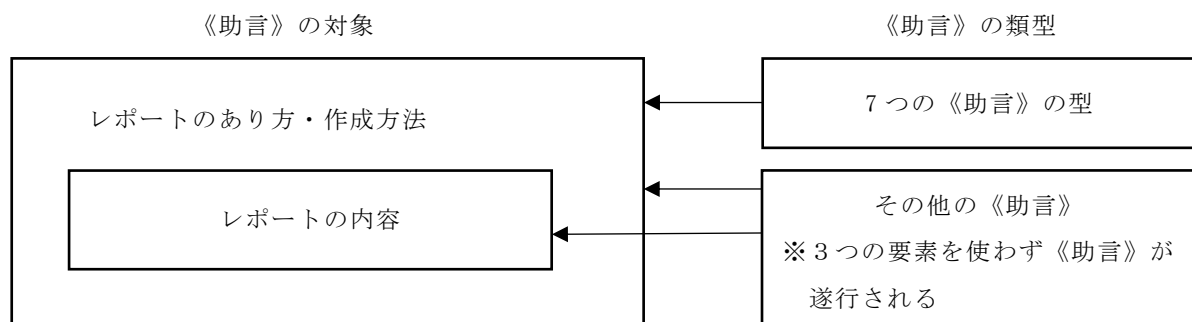


図1：ピア・レスポンスにおける《助言》の対象と類型の関係

6. おわりに

本稿では、オンラインにおける学生同士のピア・レスポンスの表現には、どのような特徴があるのか、調査し、熊取谷・村上(1992)の《助言》の伝達方略をもとに分析をした。その結果、オンラインにおけるピア・レスポンスでは、伝達方略「X+S2の提示」「Xの提示」「S2の提示」の順で多く見られ、成果物に関する問題点などの現状(S1)への言及が少ないことが明らかになった。また、《助言》の伝達方略に分類できなかったものの多くは、レポート内容や書き方に関する《助言要求》に対して、3つの要素を含めずとも助言者が見解を述べることで《助言》が遂行されるものであることがわかった。

今後、ピア・レスポンスをする際に、学生には、現状の問題点(S1)をきちんと明記するように指導することで、質の高いピア・レスポンスが期待される。また、レポート作成者に対して、学生が言うべきことをきちんと言えるようにするには、《助言》における配慮表現を理解し、扱えるようになることが、大きな後押しになると考える。ゆえに、円滑なピア・レスポンスができるように、学生同士だけでなく、教員から学生への

《助言》との比較や専門家同士のピア・レスポンスでの表現を対象に、配慮表現の整理を行っていききたい。

参考文献

- 池田玲子 (2004) 「日本語学習における学習者同士の相互助言 (ピア・レスポンス)」『日本語学』 23.1 36-50
- 伊佐菜穂子 (2020) 「第5章論文作成における仲間と教師のコメントー学習者は誰のどのようなコメントを論文に反映させるのかー」石黒圭・鳥日哲編『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか - 学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学』ココ出版 97-119
- 鹿島恵(2000) 「『助言』における表現選択と意図の伝達ー相互作用課程とコンテクストから見た談話分析ー」『三重大学日本語学文学』 11 1-14 三重大学日本語文学会
- 熊取谷哲夫・村上恵(1992) 「表現類型に見る『助言』の伝達方略」『表現研究』 55 28-35 表現学会
- 高橋千代子 (2018) 「発話行為としての助言についての多角的研究ー発話行為論による特徴の記述と会話分析による日本語の助言相互行為の記述ー」(博士論文) 京都外国語大学
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2018) 『新版 日本語語用論入門: コミュニケーション理論から見た日本語』 明治書院
- 山岡政紀編 (2019) 『日本語配慮表現の原理と諸相』 くろしお出版

(齊藤幸一、大阪電気通信大学、k-saito@osakac.ac.jp
嶋田みのり、東北学院大学、mshimada@mail.tohoku-gakuin.ac.jp
宮原千咲、広島修道大学、c-miyaha@js.shudo-u.ac.jp)